日光の冬、スケートの冬

中国シャークス、西武プリンスラビッツ、日本製紙クレインズ、王子イーグルス、アニャンハルラ、ハイワン、そしてHC日光アイスバックス(以下、アイスバックス)。皆さんは何のチームかご存知ですか？　これらは、アジアリーグに参加しているアイスホッケーのチームです。

アジアリーグは、日本の、またアジアのアイスホッケーのトップリーグです。そして、そこに参加しているのが、今シーズンで10周年を迎える、地元チーム「アイスバックス」です。アジアリーグなどの大きな大会が開催される日光は、トッププレイヤーたちの試合を間近で見られる、日本でも数少ない、恵まれたアイスホッケータウンなのです。

かつて、日光のアイスホッケーチームは「本州の雄」と呼ばれ、全国大会で何度も優勝するなど、素晴らしい成績を残してきました。しかし最近は、なかなか上位に進出することができません。また、少子化の影響もあり選手が集まらず、チームが解散するなど、厳しい状態にあります。

しかし、嘆いているだけでは始まりません。アイスホッケータウン、スケートタウンとして、そして「本州の雄」復活を目指して、日光の冬を盛り上げていきましょう。

日光アイスホッケー事始（ことはじめ）

日光のアイスホッケーを語る上で、古河電工と日光高校(現日光明峰高校)を外すことはできません。日光のアイスホッケーの歴史は、この2チームの歴史であるともいえます。

▼古河電工アイスホッケー部

アイスバックスの前身である古河電工アイスホッケー部は、大正14年に結成されました。同年に結成した苫小牧市の王子イーグルスと共に、日本のアイスホッケー界を初期から引っ張ってきた歴史あるチームです。

全国大会でなかなか優勝できずにいましたが、昭和28年の第21回全日本アイスホッケー選手権大会で、ついに初優勝を果たしました。その後は、第27回(昭和34年)、第28回(昭和35年)、第30回(昭和37年)と計4回優勝しています。また、国体やNHK杯アイスホッケー大会、全国実業団アイスホッケー大会でも優勝しています。特に、昭和37・38年にはこれらの複数の大会で優勝しており、この時期が古河電工アイスホッケー部の全盛期でした。

全国実業団アイスホッケー大会から発展したアイスホッケー日本リーグ(現在はアジアリーグ)には、昭和41年の第1回から参加しています。平成11年にチームは解散しましたが、アイスバックスへと生まれ変わり、現在に至っています。

日本リーグに参加以降は、優勝していませんが、古河電工アイスホッケー部の姿にあこがれて競技を始めた選手たちがたくさんいます。またそれだけでなく、選手やOBが指導者として子どもたちを教えるなど、日光のアイスホッケーに果たしている役割は非常に大きなものがあります。同時に、歴史あるチームとして、日本のアイスホッケーの発展にも大きな役割を果たしています。

▼日光高校アイスホッケー部

日光高校は、大正15年に設立された日光町立高等女学校が前身です。その後、県への移管や学制改革を経て、昭和24年に男女共学制になりました。そして、平成17年に足尾高校と統合し、現在は日光明峰高校となっています。

アイスホッケーは、昭和24年の男女共学制開始と同時に始められ、昭和26年に正式な部となりました。

日光高校がインターハイ(全国高等学校総合体育大会)で初優勝を遂げたのは、昭和34年の第8回大会でした。当時のトーナメント表を見ると、準々決勝、準決勝、決勝と北海道勢をたて続けに破っての優勝で、まさに「本州の雄」としての面目躍如といったところでした。また、部

員たちが着ていたユニフォームには、胸と背中にV字ラインが3本入っており、日光のアイスホッケー少年たちのあこがれの的で、多くの少年たちが、このユニフォームを着て活躍することを夢見ていました。この伝統のユニフォームは、当時のデザインのまま、日光明峰高校となった現在へと受け継がれています。

インターハイではその後、第15回（昭和41年）、第18回（昭和44年）、第28回（昭和54年）と、計4回優勝しています。また国体でも3回優勝しています。

最近は全国大会でなかなか上位に進出できずにいますが、若い高校生たちは、何をきっかけに大きく成長するか分かりません。アイスホッケーファンは、毎シーズン、日光明峰高校の活躍を期待しています。

このように、古河電工と日光高校のアイスホッケー部は、輝かしい歴史を残すと同時に、歓喜と栄光を日光にもたらしてくれました。また、オリンピック選手を輩出するなどし、後に続く選手たちに夢を与えてくれました。アイスホッケー少年たちは、日光高校、やがては古河電工へと進み、選手として活躍することを目標とし、練習に励んでいたのです。

アイスバックスに聞く

古河電工からの伝統を受け継ぐアイスバックス。監督の伊勢泰さんと、地元日光出身の選手、岡本利章さんにお話を伺いました。

伊勢 泰（いせ やすし）さん（35歳）

苫小牧工業高校を卒業後、1992-1993シーズンに古河電工へ加入。
アイスバックスを経て、2006－2007シーズンから監督に就任し、3シーズン目。
現役時代はＦＷ、背番号32。

❖苫小牧市出身の伊勢監督。日光の最初の印象は？

伊勢泰（以下、伊勢） 初めて日光を訪れたのは、中学2年生の全国中学校アイスホッケー競技会（以下、全中大会）のときでした。中学生の試合なのに、たくさんの観客がいて驚きました。その後、古河電工に入ったのですが、私が新人時代のころは、悪いプレーに対してカップ酒をリンクに投げ入れるような、熱いファンがたくさんいました。

当時と比べると、今は少しアイスホッケータウンとしてのパワーがダウンしているように感じます。しかし、2006-2007シーズンのプレーオフでの勝利のときのように、良い試合をすれば、観客もたくさん入り、盛り上がるはずです。

❖地元日光出身の岡本選手。子どもの頃や、学生時代の思い出は？

岡本利章（以下、岡本） 自分は細尾町の生まれで、友達と毎日のように細尾リンクで遊んでいました。また、友達と一緒に電工リンクで、古河電工を応援していました。

全中大会ではベスト4、インターハイではベスト8と全国優勝はできませんでした。準々決勝で負けてしまったインターハイですが、全力を出し切って、とてもスッキリした気持ちだったことを覚えています。

9月7日（日）のプレシーズンマッチ。ベンチから指示を出す伊勢監督。

❖日光のチームに入ることになったきっかけは？

伊勢 大学に進むことになっていたのですが、どうせアイスホッケーをやるなら高いレベルでと思い、ファンだった古河電工に連絡しました。そして自分のプレーを見てもらい、チームに入団することになりました。

岡本利章（おかもとととしあき）さん（23歳）

日光中学校から日光高校、中央大学へ。
大学卒業後、2007-2008シーズンからアイスバックスへ加入し、2シーズン目。
ＤＦ、背番号34。

岡本 大学卒業後、就職が決まっていたのですが、最後の最後に、「せっかく大学まで続けたアイスホッケー、さらに上を目指さないともったいない」と思い、トライアウトを受けて入団しました。

❖監督を引き受けた理由は？

伊勢 正直なところ「やる人がいないので、なんとか監督をやってくれ」ということで、半分仕方なく受けたような状態でした。現役にも未練がありましたし、自分が監督をするなんて、全く想像できませんでした。でも、1年目にプレーオフでの勝利という素晴らしい結果を得られ、監督を引き受けて良かったと思っています。

❖岡本選手がアイスホッケーを続けてくることができた理由は？また、2年目への意気込みは？

岡本 何よりも、アイスホッケーを楽しんでいることだと思います。そして上を目指す気持ちがあったから、アジアリーグの選手になれたと思います。子どもたちにもぜひ、アイスホッケーを楽しみ、上を目指す気持ちを持ち続けてもらいたいです。

自分は、まだまだひよっ子なので、先輩や監督から教わったことをプレーに生かし、一つ一つしっかりと、自分の仕事をするだけです。自分に結果がでれば、チームの結果にもつながると思います。

❖伊勢監督、最後に今シーズンの抱負をお願いします。

伊勢 今シーズンは、アイスバックスになって10年目ということもあり、選手たちも今まで以上に気合いが入っています。また、今シーズンは外国人選手も入団予定で、練習を見ていると、監督として非常に楽しみです。2006-2007シーズンのプレーオフ勝利という良い結果、そして2007-2008シーズンの悪い結果、この2シーズンの結果を踏まえた上で、プレーオフファイナルを目指します。

試合の翌日に、アイスバックスの話題で盛り上がるような、熱い試合をお見せしますので、市民の皆さんも、ぜひ応援に来てください。

今シーズンのアイスバックスの活躍を期待しています。市民の皆さんもぜひ、会場でアイスバックスを応援し、盛り上がりましょう!!

練習中の様子。一つ一つのプレーに、真剣な眼差しで取り組んでいます。

2008-2009アジアリーグ 日光シリーズの全日程

9月21日(日)午後2時から 対西武
9月25日(木)午後7時から 対中国
9月27日(土)午後4時から 対中国
9月28日(日)午後2時から 対中国
10月1日(水)午後7時から 対ハルラ
10月11日(土)午後4時から 対王子
10月12日(日)午後2時から 対王子
10月22日(水)午後7時から 対ハイワン
12月14日(日)午後4時から 対ハルラ
12月15日(月)午後7時から 対ハルラ
12月27日(土)午後4時から 対日本製紙
12月28日(日)午後2時から 対日本製紙
1月4日(日)午後2時から 対西武
1月17日(土)午後4時から 対ハイワン
1月18日(日)午後2時から 対ハイワン
2月以降プレーオフ
※会場は、すべて霧降アイスアリーナ

アイスホッケー連盟理事長に聞く

日光のアイスホッケー事情について、門馬信男さん（栃木県アイスホッケー連盟理事長）にお話を伺いました。

門馬さんはまず、現役時代の話をしてくれました。

「私は、日光高校3年生のとき（昭和41年）にインターハイで優勝できたのですが、大会前に、中宮祠の光徳に手作りのリンクを作って合宿をしたことが思い出されます。もっぱら脚力作りの毎日でしたが、仲間たちとの共同生活、そして精一杯戦って優勝できたことは素晴らしい思い出です。

その後、日本リーグ開始の年に古河電工に入りました。全盛期の選手たちが抜けたことなどもあり、チームとしては低迷が続いてしまいました。しかし、日光のファンは弱いチームでも温かく応援してくれました。そのファンは、今でもアイスバックスを応援してくれていると思います」。

現在の課題と今後の方向性を伺うと、「トップチームを頂点とした、ピラミッド型の指導ができていない点が課題だと思っています。昔は古河電工を頂点とした体制になっており、私もその流れの中で、日光高校、古河電工へと進みました。これからはアイスバックスを頂点として、その下に日光明峰高校、さらに中学校、小学校というように、一貫した指導ができればと考えています。そして、『選手生活を終えたOBが、高校生や中学生、小学生を指導する。教わった生徒たちが選手としてアイスバックスに入る。選手生活が終われば指導者になる』という良いサイクルを築くことが理想です。

まずは、頂点のアイスバックス、その下の日光明峰高校を、強くて魅力あるチームに育て、あこがれのチームにしなければならないと思っています。そのためにも、厳しい現状のアイスバックスを、アイスホッケー連盟としてもバックアップし、安定させることが必要だと考えています。

また、小学生を対象としたアイスバックスのジュニアチームを作る構想もあります。これは、試合に出るためのチームではありません。一貫した方針で選手を育成し、日光全体のレベルを上げたいと考えています」と答えてくれました。

門馬さんは最後に、「近くでトップレベルの試合が見られるのですから、日光市民は幸せです。アイスホッケーは試合会場で見ると、雰囲気などが全く違います。ぜひ霧降アイスアリーナに来て、アイスバックスを応援してください。

もしアイスバックスがなくなると、日光のアイスホッケーはレベルが下がり、一気に廃れてしまうでしょう。それは、日光の伝統・文化を失うということだと思います。日光の伝統・文化を引き継いでいくためにも、皆さんのバックアップをお願いします」と熱く語ってくれました。

昭和41年のインターハイ優勝時の１コマ。後列右から２人目、ユニフォーム姿が門馬さん。写真は栃木県立日光高等学校アイスホッケー部50周年誌より。

門馬信男（もんまのぶお）さん（60歳）

昭和41年、日光高校でインターハイ優勝。
高校卒業後、古河電工で選手、監督として活躍。
現在、栃木県アイスホッケー連盟理事長を務める。

日光のスケートを取り巻く厳しい現状

日光は昔から、アイスホッケーだけでなく、スピードスケートやフィギュアスケートも盛んに行われてきました。特に、日光高校スピードスケート部は輝かしい歴史を持っており、オリンピックや世界選手権、ワールドカップなどの日本代表選手を輩出してきました。しかし現在では、日光のスケート競技全体が、厳しい現状にあります。特にスケート人口の減少は切実な問題です。

▼スケート人口の減少

少子化により日本全体で子どもが減っており、それと比例して、スケートをやる子どもたちも減ってきています。日光だけでなく、スケート王国の北海道でも、子どもが減ってチームが作れないこともあります。

また、同時に指導者も減少しています。ほとんどの指導者は、自分の職業を持ちながら、子どもたちの指導をしています。しかし、時間的・金銭的にも負担が大きく、両立はなかなか難しいものとなっています。

▼スケートが身近でなくなった

昔に比べてスケート場が減りました。天然のスケート場が各地にあったころ、冬になると、学校が終わった子どもたちは、近くのスケート場で毎日のようにスケートを滑って遊んでいました。

また、テレビやゲームなどの台頭で、子どもたちが外で遊ぶことが少なくなりました。娯楽の少なかった時代は、子どもたちが冬に楽しめるものはスケートくらいしかなかったこともあり、たくさんの子どもたちがスケートを楽しんでいました。

これらの理由で、スケートが身近でなくなり、特別な競技スポーツになってしまいました。

▼保護者の負担

スケートに限りませんが、子どものスポーツ活動は、どうしても保護者の負担が大きくなります。練習場への送迎はもちろんのこと、道具や遠征の費用などの金銭的な負担も掛かります。

また、野球やサッカーなどの競技人口が多いスポーツと比べ、スケートは競技人口が少ないため、比較的容易に全国大会に出場できます。しかし、大会に参加するためには必ず費用が発生します。しかも、北海道で全国大会が開催されるとなれば、かなりの遠征費用が必要となり、保護者はその費用も負担しなければなりません。

今後への期待

スケートを取り巻く環境には、さまざまなマイナス要素がありますが、日光のスケート振興のためには、それらを乗り越えていかなければなりません。

▼旧日光市から新日光市へ

「スケートといえば日光」というイメージがあります。当然、この日光は現在の日光地域（旧日光市）を指していました。しかし、現在は合併した新日光市です。これからは、日光地域以外の子どもたちも、今まで以上にスケートに親しみ、スケートを続け、選手となる人がたくさん出てくることと思います。

そして、市民の皆さんに「スケートは私たちに身近なもの」と感じてもらえるようにならなければなりません。

▼少子化をプラスへ

少子化は非常に重要な問題で、そのマイナス面がさまざまなところで取り上げられます。しかし、現実に子どもが少ない以上、その少子化をあえてプラスにとらえて考えなければなりません。

子どもが少ないということは、昔と比べ、保護者がかけられるお金や

時間を、1人の子どもに集中できるということです。前述したとおり、スケートは保護者の負担が大きい競技ですが、子ども1人に集中することを考えれば、昔に比べ、その負担も軽減されるはずです。

ただし、現代は娯楽も含めて選択肢が非常に多くなっています。その多くの選択肢の中からスケートが選ばれるには、子どもたちがスケートをする機会を増やし、身近に感じ、スケートを楽しいと思える環境を作らなくてはなりません。

底辺拡大のための取り組み

底辺を拡大し、スケート人口を増やすためには、子どもたちがスケートに興味を持ち、楽しいと感じてもらえるようにしなければなりません。また、子どもたちがスケートに触れる機会を増やすことが必要です。

このため、市と連盟で協力して各種の事業を行っています。

▼スケートリンクの無料利用券配布

平成19年度から、市内在住の中学生以下の子どもたちに、スケートリンクの無料利用券を配布しています。

この券で、市内のスケートリンク（細尾ドームリンク、霧降スケートセンター屋外リンク、今市青少年スポーツセンター屋内リンク）が無料で利用できます。金銭的負担を減らすことで、子どもたちがスケートに触れる機会を増やしています。

▼各種スケート教室

霧降スケートセンターでは、アイスホッケー・フィギュアスケート・初心者の3コースでスケート教室を開催しています。

アイスホッケーとフィギュアスケートは、小学生の経験者対象のコースとなっていますが、教室に参加することで、スケートに触れる時間を増やしています。また、初心者コースでは、就学前の子どもたちが、元気に遊んでいます（写真上段右）。

初心者コースで講師を務める薄井智幸（ともゆき）さんは、「ゲームなどを取り入れて、遊びながら教えています。何よりも、スケートが楽しいと思ってもらえるように心掛けています」と話してくれました。子どもたちにスケートの楽しさを伝えるため、講師の方も頑張っています。

▼小学校教職員のスケート研修会

スケートを通して子どもたちの健康や体力の増進を図るとき、学校との連携は欠かせません。その中でも特に、スケート教室などで子どもと一緒にスケートをする機会のある先生は、その重要な役割を担っていることになります。

スケート教室のとき、子どもたちは先生と一緒に滑り、遊びたいはずです。しかし、先生が滑れなければ、それもできません。子どもたちと一緒に滑れるように、そして子どもたちにスケートを教えられるように、先生を対象としたスケート研修会を行っています（写真上段中）。

受講した先生は、「小学生のとき以来、約10年ぶりに滑りました。最初は怖かったけど、だんだん昔の感覚を思い出しました。この冬は、子どもたちと一緒に楽しみたいです」と話してくれました。

地域振興のための取り組み

▼女子中学・高校生アイスホッケーの聖地「日光」

㈶地域活性化センターの承認を受けて進められている、スポーツ拠点づくり事業。これは、野球の「甲子園」やラグビーの「花園」のように、「スポーツごとに拠点をつくることで、スポーツの振興と地域の再生を進める」目的で行われています。そして、特定のスポーツを一つの地域で継続して開催し、「まちの顔」とすることで、地域の活性化につなげていくことが期待されています。

市ではこの承認を受け、「女子中学・高校生アイスホッケーの聖地」として、平成18年から日光杯全日本女子中学・高校生アイスホッケー大会を開催しています（写真前ページ上段左）。日光市の選手を中心とした栃木県選抜チームは、平成18年の第1回大会で3位、平成19年の第2回大会では4位の成績を残しています。

今年も12月4日（木）～7日（日）、日光霧降アイスアリーナと細尾ドームリンクを会場に、第3回大会が開催されます。

若い世代の台頭

▼小学生たちの活躍

最近は全国大会で上位に進出していないと前述しましたが、実はここ3年で2回も全国優勝している大会があります。それが風越（かざこし）カップ全日本少年アイスホッケー大会です。この大会は、長野県軽井沢町で開催されている小学生のアイスホッケー大会で、スポーツ拠点づくり事業にも承認されています。

日光市の選手を中心とした栃木県選抜チームは、平成18年の第1回大会（写真上段右）、平成20年の第3回大会（写真上段左）で優勝しています。この大会で活躍した少年たちは現在中学生。近い将来、彼らが、「本州の雄 日光」の復活を見せてくれることを、私たちに期待させます。

おわりに

保護者の方に、お子さんがスケートを始めたきっかけを伺うと、「子どもがやりたいと言ったから」という答えがほとんどでした。また、「お子さんのスケート活動が負担になっていませんか？」という問いにも、重荷になっているというような否定的な回答は聞こえません。

さらに、保護者の皆さんはいろいろな思いを聞かせてくれました。

「厳しい練習をしているのが分かるので、上達しているのが目に見えると本当にうれしいです」

「危険なスポーツなので、けがだけはしないようにと、いつも願っています」

「無理強いはしませんが、子どもがやりたいと言えば、今後もスケートを続けさせてあげたいです」

「子どものやる気が大切だと思っています。一度やめたいと言ったこともありましたが、最後には、自分からやりたいと言ってまた戻りました。そうやって子どもが成長し、頑張っているのが分かるから、親も続けることができます」

保護者の方のお話を聞くと、皆さんお子さんを愛し、「子どもの好きなことをやらせてあげたい」という思いで、練習や試合に付き添い、応援しています。日光のスケートは、このような方たちの思いと力に支えられています。

最後になりますが、初心者コースのスケート教室に参加していた女の子の言葉「スケート楽しい！」、何よりもこの言葉につきるのではないでしょうか。子どもたちが、この気持ちを持ち続けること。そして、持ち続けられるように周囲がサポートすること。それが「本州の雄」復活、そして日光のスケート復活へとつながるはずです。

今回の編集にあたり、ご協力いただいた多くの方々に、お礼申し上げます。

《参考資料》
・古河電工アイスホッケー部60年史
・栃木県立日光高等学校アイスホッケー部50周年誌